（対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
・国際交流拠点形成事業）

事業名： 東アジア地域の学術文化交流促進事業及び
国際交流展関連講演会

事業者名：宮崎県立西都原考古博物館

住所：宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番地

ＴＥＬ：0983-41-0041

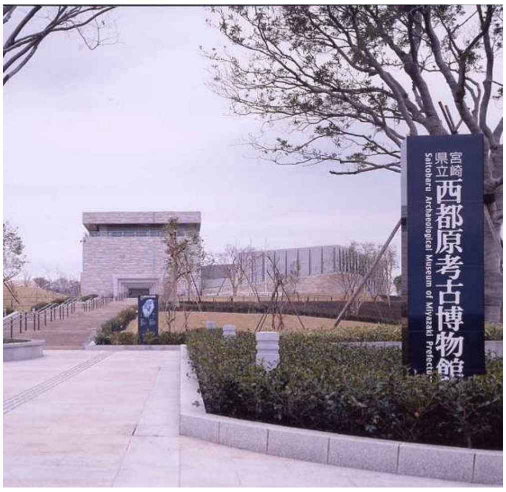
ＦＡＸ：0983-41-0051

ＨＰアドレス：http://saito-muse.pref.miyazaki.jp

連携事業者名：韓国国立中央博物館・韓国国立中原文化財研究所・台湾史前文化博物館

会　　場：宮崎県立西都原考古博物館ほか

事業期間：平成２２年７月８日 ～ 平成２３年３月１５日



宮崎県立西都原考古博物館

１．館の使命と本事業の関係

本館では、平成 16 年 4 月の開館以来、「古代における東アジア地域の文化交流」を重要なテーマと位置付けて調査研究を行っており、その調査・研究の成果を「日韓交流展」及び「国際交流展」での展示などにおいて公開してきた実績がある。この取組は、開館以来６年を経て、学術文化の側面での交流事業として定着しつつある。

今回の事業もこうした活動の一環であり、館活動の一層の充実に資するものと考える。

２．企画内容

①事業目的

本館では、平成16年の開館以来、毎年「日韓交流展」を開催し、日韓の文化交流に関する展示や関連講演会を実施してきた。平成21年度からは、台湾や中国大陸に対象領域を広げて、学術研究と普及活動に重点を置いた事業を展開し、日本・韓国・台湾の考古資料による「国際交流展」を開催してきた。本年度も、昨年度からの事業を継続し、深化させるために、さらに展示会や共同研究を通じた人的交流を促進し、それぞれの国・地域との相互理解の促進に資するものとする。

②事業概要

本年度は、稲作文化成立以前の南九州における初期農耕文化の成立と展開について、国内のみならず、大陸・半島ルートと南方ルートの影響という広く東アジアの視点から考えるため、韓国と台湾の博物館や研究機関から資料を借り受け、「国際交流展 東アジアの石器」と題する展示を実施する。また、展示だけでなく、東アジアの研究者を招聘しての講演会を実施することにより、南九州を含んだ東アジア地域の初期農耕文化の成立について、稲作文化成立以前について、見学者の関心や理解を深めるとともに広く情報発信を行う。

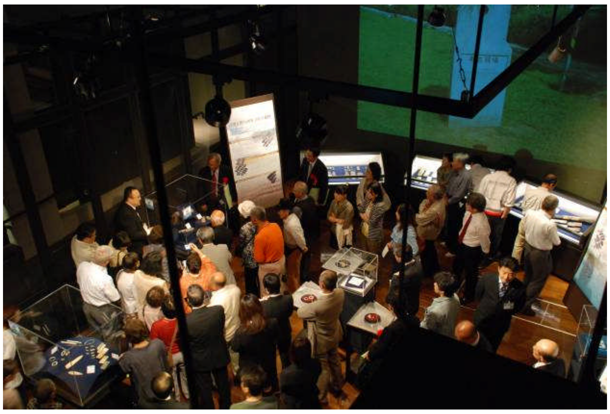
また共同調査・研究の一環として、韓国国立中原文化財研究所との間で相互に研究者を派遣する。さらに、それぞれの地域の古墳にまつわる文化について相互理解が深められるよう、互いの地域についての研究を促進する。韓国国立中央博物館考古部とは、農耕文化成立段階の様相について、相互に資料調査を行う。

３．事業実績

（１）事業の主な内容及び日程

①国際交流展「東アジアの石器」開催

今年度は、稲作文化成立以前の南九州の初期農耕文化の成立と展開について、国内のみならず、大陸・半島ルートと南方ルートの影響という広く東アジアの視点から考えるため、韓国と台湾の博物館や研究機関から資料（韓国78点・台湾124点）を借り受け、「国際交流展　東アジアの石器」（会期：平成22年10月9日～12月12日）と題する展示会を実施した。期間中、約20,000人超が入場し、観覧者は、韓国・台湾・日本の石器資料を比較しながら当時の農耕文化に思いをはせていた。



国際交流展「東アジアの石器」展示時解説風景

②国際交流展関連講演会実施

本展に関連して、台湾大学の陳有貝副教授が「台湾新石器時代の農業関連問題」と題して、平成22年10月9日に講演会を実施した。講演は、農耕文化の受容と展開がどのように台湾の文化に影響を及ぼしたのかについて、日本語を用いてわかりやすく説明いただくものであった。

③韓国国立中原文化財研究所との共同調査

a. 宮崎県立西都原考古博物館での共同調査

日時:平成22年12月6日(日)～12日(日)

韓国国立中原文化財研究所から学芸研究士の魚昌善氏が来県し、西都原202号墳や生目22号墳など宮崎県内の前方後円墳の発掘調査現場を視察し、古墳の調査方法について各調査担当者などと意見を交わした。また、同学芸研究士は、当館で共同調査における中間成果報告として「中原地域古墳の展開様相」と題し、講演を行った。

共同調査における中間成果報告会

b．韓国国立中原文化財研究所での共同調査

日時：平成23年2月21日(月)～26日(土)

場所：韓国国立中原文化財研究所（韓国忠清北道忠州市）など

平成23年2月に、当館学芸普及担当の甲斐貴充が、韓国国立中原文化財研究所に赴き、朝鮮半島の三国時代古墳出土の鉄製品についての資料調査を同研究所員と共同で行う。また、甲斐が韓国国立中原文化財研究所で共同調査における中間成果報告として「南九州と韓半島の関連」と題し、古墳時代における南九州の古墳の特徴及び南九州における朝鮮半島関連考古資料についての講演を行った。

④韓国国立中央博物館考古部との共同調査

日時：平成22年11月22日(月)～27日(土)

場所：韓国 国立中央博物館・国立済州博物館・国立光州博物館など

平成21年度から、農耕成立段階の韓半島と南九州の様相についての資料調査を共同で実施している。今年度は、本館学芸普及担当の藤木聡が、国立中央博物館考古部の職員と共に、朝鮮半島南西部の湖南地方と済州島の考古資料の資料調査を行った。調査対象は、日本の縄文時代後期から弥生時代前期頃にあたる土器と石器である。

（２）参加者の数

国際交流展観覧者数　　　延べ ２０，５６４人

（３）事業により作成した印刷物等

国際交流展の展示図録700部，ポスター700部，ちらし2,000部を作成し，関係機関に配布した。

また，本年度の当事業の概要を記した報告書を200部を作成し，関係機関に配布した。

国際交流展のポスター

（４）実施事業に関する新聞記事等

〇新聞記事

・宮崎日日新聞［宮崎］　平成22年10月10日朝刊

・台東縣政新聞［台湾］　2010年7月10日など

台湾出土品も紹介
東アジアの石器展示
西都

日本、韓国、台湾の国際交流展「東アジアの石器～石器にみる農耕文化」は9日、西都原考古博物館で始まった。旧石器、縄文時代などの出土品337点が集められている。入場無料。12月12日まで。

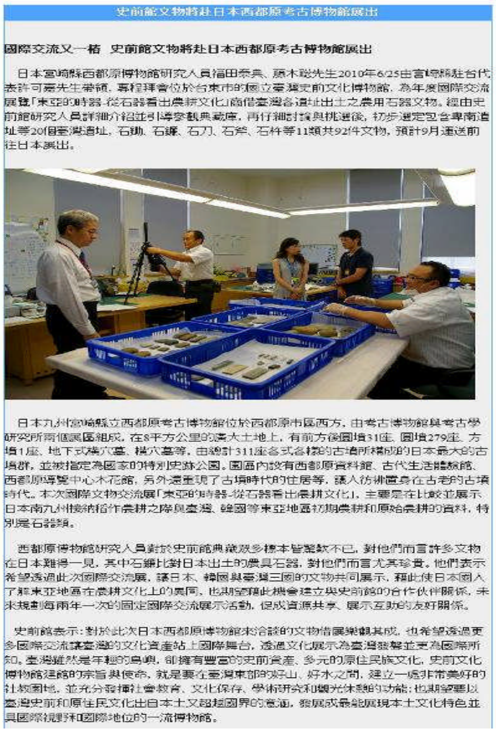
会場では、韓国の地境里遺跡から出土した碾石（てんせき）や碾石棒を展示。この二つの石器は、穀物などを製粉・脱穀するための道具と考えられており、新石器時代の人々の営みを知る貴重な資料となっている。

台湾の遺跡から発見された有肩石斧、石包丁なども並べて紹介。台湾の出土品が日本で展示されるのは珍しく、同博物館は「両国と地理的に近い九州で展示会を開くことで、農耕文化の広がりが分かる」としている。

同日には韓国国立中央博物館のカン・ベヒョン企画運営団長と台湾史前文化博物館のギングロー・マセゲセゲ館長も訪れ「展示会や共同研究が今後の協力関係につながると

台湾の遺跡から出土した石器に見入る来館者

宮崎日日新聞（H22.10.10）



史前館文物將赴日本西都原考古博物館展出

國際交流又一樁　史前館文物將赴日本西都原考古博物館展出

日本宮崎縣西都原博物館研究人員福田泰典、藤木聡先生2010年6/25由宮崎縣駐台代表許可嘉先生帶領，專程拜會位於台東市的國立臺灣史前文化博物館，為年度國際交流展覽「東亞的時器-從石器看出農耕文化」商借臺灣各遺址出土之農用石器文物。經由史前館研究人員詳細介紹並引導參觀典藏庫，再仔細討論與挑選後，初步選定包含卑南遺址等20個臺灣遺址，石鋤、石鐮、石刀、石斧、石杵等11類共92件文物，預計9月運送前往日本展出。

日本九州宮崎縣立西都原考古博物館位於西都原市區西方，由考古博物館與考古學研究所兩個展區組成，在8平方公里的廣大土地上，有前方後圓墳31座、圓墳279座、方墳1座、地下式橫穴墓、橫穴墓等，由總計311座各式各樣的古墳所構成的日本最大的古墳群，並被指定為國家的特別史跡公園。園區內設有西都原資料館、古代生活體驗館、西都原導覽中心木花館，另外還重現了古墳時代的住居等，讓人彷彿置身在古老的古墳時代。本次國際文物交流展「東亞的時器-從石器看出農耕文化」，主要是在比較並展示日本南九州接納稻作農耕之際與臺灣、韓國等東亞地區初期農耕和原始農耕的資料，特別是石器類。

西都原博物館研究人員對於史前館典藏眾多標本皆驚歎不已，對他們而言許多文物在日本難得一見，其中石鐮比對日本出土的農具石器，對他們而言尤其珍貴。他們表示希望透過此次國際交流展，讓日本、韓國與臺灣三國的文物共同展示，藉此使日本國人了解東亞地區在農耕文化上的異同，也期盼藉此機會建立與史前館的合作伙伴關係，未來規劃每兩年一次的固定國際交流展示活動，促成資源共享、展示互助的友好關係。

史前館表示：對於此次日本西都原博物館來洽談的文物借展樂觀其成，也希望透過更多國際交流讓臺灣的文化資產站上國際舞台，透過文化展示為臺灣發聲並更為國際所知。臺灣雖然是年輕的島嶼，卻擁有豐富的史前資產、多元的原住民族文化，史前文化博物館建館的宗旨與使命，就是要在臺灣東部的好山、好水之間，建立一處非常美好的社教園地，並充分發揮社會教育、文化保存、學術研究和觀光休憩的功能；也期望要以臺灣史前和原住民文化由本土文超越國界的意涵，發展成最能展現本土文化特色並具國際視野和國際地位的一流博物館。

台東縣政新聞（2010.7.10）

〇テレビ，関連誌等

【テレビ】

・なし

【関連誌】

・文化庁　『文化庁月報』3月号（通巻510）

「台湾・韓国の考古資料を用いた国際交流展」

４．事業の成果及び今後の課題

国際交流展は，当該期における韓国・台湾と南九州の石器資料の比較を中心に構成したものであり，これまで韓国・台湾両地域に特有なこの時期の石器資料を同時に見られる機会は少なかった。来館者の多くは，南九州と両地域とは海を隔てているため遠い世界であるという印象を持っていたものと思われるが，海を通路として考えると両地域は近接しており，両地域が南九州と共通する石器を有する事実を知るなど，新たな視点を与えられたのではないかと考えられる。

また，台湾側にとっても，台湾の博物館から先史時代の考古資料が本格的に海外に貸し出される例はほとんど無く，台湾内での反響も大きく，資料調査や借用時に台湾のテレビ局や新聞社が取材に来るという珍しい光景もうかがえた。台湾では，先史時代の考古資料よりも有史以降の美術工芸品が人々の注目を浴びる傾向があり，そうした状況下で，今回の展示は，台湾の博物館にとっても，台湾先史時代の考古資料の存在とその意義を広く発信できる好機となったと考えられる。

国際交流展関連講演会については，台湾の考古学研究者が宮崎で講演する機会は初めてであった。講演者の陳有貝氏は，台湾の農耕文化成立段階の様相を石器資料中心に，わかりやすく説明していただいた。聴講者は，講演を聴くことによって，台湾と南九州の文化を容易に比較検討でき，展示がよりわかりやすく，より深く理解できる好機となったようである。

韓国の国立中央博物館や国立中原文化財研究所との共同調査については，両機関の研究者が共同で調査を行ったことで，南九州と韓国の考古資料における相違点と共通点について確認できる機会となり，当館のみならずそれぞれの研究機関においても新しい研究視点を与えることができたと思われる。また，今後，両研究機関において当館と共同で研究報告書などを刊行する計画もあり，南九州と韓国間の考古学研究が進む方向性が見えつつある。

今後の課題としては，展示会において期間中 20,000 人超の観覧者が訪れたが，県外からの観光客などが占める割合が比較的高い。宮崎県内のテレビ・ラジオなどの報道などに取り上げられる機会は少なく，こうした国際交流の取り組みがまだ地域住民にとって認識されていない部分が多い。今後は，十分な広報活動などを通して，地域により密着した展示会や講演会を目指していく必要があると考えられる。